

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520817

研究課題名（和文） 民主主義の人類学—ヴァナキュラー・デモクラシーの課題と可能性

研究課題名（英文） Anthropology of Democracy: Problem and Possibility of Vernacular Democracy

研究代表者

田辺 明生（TANABE AKIO）

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：30262215

研究成果の概要（和文）：

現代インドにおいて、ガバナンスと資本の作用は急速に草の根へと浸透しており、それに呼応するように、下からの諸下層民の政治経済的な主体化も進展しつつある。両者の動きは、矛盾を含みながらも、相互補完的に進展している。こうした動きを支えているのは、多様な主体の参加機会を保障しようとする、民主的諸制度であり、そのなかで、諸下層民は、在来の価値や社会関係と、民主制の理念と制度を創造的に媒介し、グローバルな現実的状况で自らの主体性を発揮できるようなヴァナキュラー・デモクラシーの構築を模索している。

研究成果の概要（英文）：

The effects of governance and capital are rapidly penetrating into grass root levels in India today. At the same time, there is growth and strengthening of politico-economic agency of various subaltern groups and minorities. Although these trends involve contradictions and conflicts, it is important to consider them as parallel and complementary developments. The current developments are supported by democratic institutions that guarantee opportunities for political participation by diverse agents. Subaltern groups and minorities are searching for ways to exercise their agency in the contemporary glocal context by articulating and constructing a vernacular democracy that creatively mediates values and social relations in the lifeworld with democratic ideals and institutions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学・政治学・インド・カースト・民主主義

1. 研究開始当初の背景

従来の民主主義や民主化の研究は、国家学の系譜を持つ政治学が主流を占めていたこともあり、国家政治の制度や理念に焦点をおくことが多かった [e. g. R. ダール 2001 年『デモクラシーとは何か』]。世界の諸地域の固有性に即しつつ、人間の主体性発揮という普遍的価値に根ざした民主主義は、いかに実現できるだろうか。この現代的かつグローバルな課題を実現していくためには、諸地域の社会と文化に対する深い理解をもちながら、同時に、人類社会の普遍的な構造と価値に対する洞察を深めてきた人類学の知見を生かすことが求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヴァナキュラー・デモクラシーという観点から、グローバルな民主主義の実践と思想について考察を行い、人類学の視点から、民主主義に関する政治哲学をその根本から再検討することにあつた。その主眼は、世界的に多様な民主主義のかたちを民族誌的な観点から明らかにすること、現在新たに築かれつつある民主的な社会運動のネットワークを描写すること、そして、そうした経験的事実に立ちながら、民主主義の実践と理念を、西洋主導の国家学の桎梏から解放し、人類学の観点から真の意味で地球社会にとって普遍的な実践哲学へと磨き上げることにあつた。

本研究の意義は、グローバルな世界における民主主義の意義と民主化の過程について、人類学的視点から抜本的な再考を迫ることにある。本研究においては、在地の文化資源

と民主主義の精神を接合するヴァナキュラー・デモクラシーとグローバルな民主主義の新たなネットワークの展開に注目することで、通常の自由民主主義の枠組みを超えた民主主義の諸形態の可能性をみようとする点で、人類学からの政治哲学の根源的な問い直しの契機を提供できるだろう。

3. 研究の方法

本研究は、日本での文献研究およびインドでのフィールドワークをつうじて行う。また、諸地域の専門家との議論を進め、私の考えるヴァナキュラー・デモクラシーおよびグローバルな民主主義のネットワークという枠組みを理論的に深めるために、積極的にインターディシプリナリーかつ国際的な学術交流をなす。インドにおける現地調査では、インドの研究者の助けを借りつつ、インド各地の村落や都市を訪問し、そこにおける政治活動および社会運動の実際を参与観察する。

4. 研究成果

(1)2009 年度：

主に関連の文献資料を収集し読解を進めてきた。その過程でヴァナキュラー・デモクラシーの概念を、人類学と政治学を架橋して、どちらのディシプリンを専門とする人にも分かりやすいものとなるように、より普遍的なものへと鍛え上げる努力をした。またインドにおけるフィールドワークを8月に行った。インドにおいては、インド・オリッサ州の村落自治体の運営の実態をサーベイした。大幅な権限委譲と財の再分配を得て、村落自治体および地域社会は大きく変容しつつある。地

域社会の変容を、インド全体および世界全体のグローバル化の現象とどのように結び合わせて理解するかがポイントとなるであろう。

(2)2010 年度：

主に関連の文献資料を収集し読解を進めてきた。またインドにおけるフィールドワークを8月に行った。インドにおいては、インド・オリッサ州におけるニヤマギリのボーキサイト開発をめぐる問題について調査をした。グローバル企業、地元トライブのドングリア・コンド、中央政府、州政府、社会運動家、NGOなど利害関係と価値観の異なるさまざまな主体がどのようにからみあっているのかについてサーベイした。現代インドの民主主義の活況は、従来は周縁化されてきた下層民を含む多元的な主体が、少しずつ声をあげられる状況になっていることと関わっている。ただし資本と権力の都合が優先される現状のなかで、彼らの声がどの程度実際に聞かれるようになっているのかは、慎重な検討が必要だろう。こうした問題をめぐるグローバルな民主主義のありかたを理解するには、ネットワークの全体をできるだけ丁寧に追いかけていくことが必要になるであろう。

(3)2011 年度：

調査については、オリッサのいくつかの県をサーベイした。特に、1992年の地方分権化によって大幅な権限を有するようになった村落自治体の運営の実態を調査し、またさまざまな政治社会運動の運動家に会ってインタビューを行った。特に興味深かったのは、外部資本の導入による鉱山開発や工場設立を巡って、全国的な議論と運動が展開していたことである。これはグローバル市場と地域社会が接合する過程において、現地住民や市

民が一方的な受け身にあるのではなく、政治過程やメディアや社会運動を通じて声をあげる政治経済的主体として現出しつつあることを示している。調査の過程では、「民衆、人民」(loka, people)ということばがしきりに聞かれ、この「民衆、人民」とは誰か、誰が公共領域への参加権を有するのか、また発展・開発は誰のために誰が行うのか、ということが論争の焦点になっていることが確認された。また現代インドにおいて、地域社会の価値や社会関係とグローバル経済をいかに結ぶかという問題に即して、ヴァナキュラー・デモクラシーという民衆参加の民主政治が新たに活性化していることが確認できた。これは地域に即したあらたな民主主義のかたちが生まれつつあることを示すと考えられる。

本研究プロジェクトの全体を通じて、ヴァナキュラー・デモクラシーという視角の有効性を確認できた。現代インドの下層民は、グローバル化する新たな世界のなかで、自らの生存を確保し、生活向上するための機会と場を獲得することを求めている。そうした動きは、地域の固有の発展径路に根ざしながら、同時に、グローバルに展開しつつある資本やガバナンスの働きに呼応するものである。そこにおいて、地域の生活世界に根ざした固有の実践と言説の様式と、民主主義の制度と精神とを、相互影響のうちに実践的に架橋するヴァナキュラー・デモクラシーがさまざまな様態において展開している。この動態において、新たなグローバルなネットワークが形成され、人々が自らが生きる関係性を再構築する可能性が現れていることが注目される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 田辺明生「多様性のなかの平等-生存基盤の思想の深化に向けて」杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編『歴史のなかの熱帯生存圏-温帯パラダイムを超えて』2012, pp. 467-515, 査読無。
- ② 田辺明生・常田夕美子「関係性の政治-開発と生存をめぐるグローバルネットワーク」速水洋子・西真如・木村周平編『人間圏の再構築』2012, pp. 333-371. 査読無。
<http://www.kyoto-up.or.jp/book.php?id=1783>
- ③ 田辺明生「トランスカルチュレーションとナショナリズム-ガンディーにおける身体と政体の自己統治(スワラージ)」田中雅一・奥山直司編『コンタクトゾーンの人文学第4巻 ポストコロニアル』4巻, 2012. 査読無。
- ④ 加藤和人・木村大治・斎藤清明・田辺明生・松田文彦・横山俊夫「座談会「現代生命科学と言葉-「パーソナルゲノム時代」の人間を語る言葉」をめぐる」横山俊夫編『ことばの力-あらたな文明を求めて』2012, pp. 343-404, 査読無。
<http://www.kyoto-up.or.jp/book.php?id=1792>
- ⑤ Akio TANABE “King, Goddesses and Jagannath: Regional Patriotism and Sub-regional and Local Identities in Early Modern Orissa.” Georg Berkemer and Hermann Kulke eds. *Centres Out There? Facets of Subregional Identities in Orissa, India*, 2011, pp. 227-253. 査読無。
- ⑥ 田辺明生『「カーストと平等性」の背景とこれからの展望』『アジ研 ワールドトレンド』192, 2011. pp. 38-45, 査読無。
<http://webopac.ide.go.jp/webopac/ctlshr.do?bibid=AB20394907&listcnt=10&maxcnt=100>
- ⑦ 田辺明生「現代インド地域研究-私たちは何をめざすか」『現代インド研究』第1号 2011. 査読有。
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/151817>
- ⑧ 田辺明生「植民地期インド・オリッサにおける社会変容——歴史人類学的検討」『人文学報』第98号、2009. 査読有。
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/134787/1/98_1.pdf

[学会発表] (計3件)

- ① 田辺明生 “Indian Politics at the Crossroads: Representation, Participation and Vernacular Democracy” XIth Conference of Indian Congress of Asian & Pacific Studies (ICAPS) in collaboration with Association of Asia Scholars (AAS), September 5th, 2011, Institute of Development Studies, Jaipur (IDSJ).
- ② 田辺明生・常田夕美子 “Connection, Friction and Vibrancy: Vernacular Democracy, Circumfluent Economy and Globalization in Contemporary Rural Orissa, India” International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), the Australian Anthropological Society (AAS) and the Association of Social Anthropologists of Aotearoa/New Zealand (ASAANZ) Conference, July 8th, 2011, University of Western Australia, Perth.
- ③ Akio Tanabe “Vernacular Democracy and Circumfluent Economy in Contemporary India” American Anthropological Association 109th Annual Meeting, November 17th, 2010, New Orleans, Louisiana, U.S.

[図書] (計5件)

- ① 杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生編『熱帯のなかの熱帯生存圏-温帯パラダイムを超えて』京都大学学術出版会, 2012. 400頁。
- ② Akio Tanabe, Kazuya Nakamizo, Shinya Ishizaka and Chie Fukuuchi (eds.) *Development, Environment and Socio-political Transformation in South Asia: Diversity and Sustainable Humanosphere in Contemporary Dynamism, Proceedings of the International Workshop*, 2011, 101p.
- ③ 田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』世界思想社 2010、309頁。
- ④ 杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生編『地球圏・生命圏・人間圏——持続型生存基盤とは何か』京都大学学術出版会 2010、427頁。
- ⑤ 田辺明生『カーストと平等性-インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010、576頁。(平成22年度第14回「国際開発研究・大来賞」、平成23年度第32回「発展途上国研究奨励賞」)

[その他]

ホームページ等

<http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/asia/rekan/tanabe/html/works.html>

<http://kyouindb.iimc.kyoto-u.ac.jp/j/hX8rE>

http://www.fasid.or.jp/okita/okitashoic_hiran.html

<http://www.utp.or.jp/topics/2010/11/22/oxyyeeeauauael4onyeuaeaciethoothth/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田辺 明生 (TANABE AKIO)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：30262215